

### 3— 強めるだけでなく、弱めること



単調な感じがするので、「Typo」をグレーにしてみる。これによって、「Typo」と「Expo」のバランスがとれてくる。強めることだけでなく、弱めることで逆に両者が生きてくるということもある。グレーの濃さによっても異なるので、いくつかの濃度で試してみるとよい。

### 4— 他の要素を配置する



場所や期間の情報を割り振る。「Tokyo」の「T」はこのなかで一番大きい「Typo」の「T」ともダブるので、同じ書体か、まったく違うサンセリフ体を使う。中途半端に似ている書体を使うと、違いが明確に見えてしまって、統一感がなく感じられる。

#### Column

#### 明朝体の選択

明朝の書体ではひらがなの「の」に注目してみましょう。ヒラギノのように筆運びを感じさせる書体と、小塚明朝のようになめらかで筆らしさを感じさせない書体があることに気づきます。写植の書体には、一つの書体に対して「KL」と「KS」という2種類がありました。これは仮名の大小を表しています。選択できるということは、仮名の大小によって見栄えが違うということです。毛筆の書では漢字に対して仮名を小さく書くのが普通です。これによって、メリハリのある流れるような表現になります。ところが、最近の書体は、漢字に対して仮名がそれほど小さくないものが増えてきました。文章や見出しなどは、遠くから見ると一つのブロックに見えます。デザイン全体から見ると、この文字ブロックが均一に見えたほうが美しく感じられます。仮名の大小といったことも書体選びのポイントになります。



### 練習2 イタリックでセリフ書体の曲線を活かす



セリフ体のイタリックを使うことで、デザインのなかに柔らかな曲線と、斜め方向への流れを作り出すことができます。セリフ体のイタリックの特徴を活かしたデザインを試してみます。

### 1— 欧文イタリックでデザインする



欧文書体のイタリックは文字を単純に斜めに変形しただけでなく、独自にデザインされた書体なので、標準書体とは別の美しさがある。これを活かしてデザインしてみよう。特に小文字のほうが、線の形に特徴があることが多い。

### 2— 斜めのラインに揃えて配置



イタリックの斜めのラインに揃えて「Expo」を配置する。左上から右下へ、自然な視線の移動によって一つの言葉として感じられるようにしたい。また、「po」の繰り返しリズムを感じさせられたら、なおよい。

### 3— 背景を黒と白に分割する



さらに、背景を黒と白に分割し、「Typo」を白抜きにする。これによって、文字が明確に認識できるようになり、力強さも感じられるようになる。背景が白だけでは寂しくなるので、背景でアクセントをつけることが重要だ。



### 4— 配色を試行錯誤する



左右を逆にして左を黒に白抜き、右を白に黒抜きにしてみる。この場合、黒に白抜き文字のほうが印象が強いので、「Expo」のほうが目立ってしまうように感じる。逆も試してみることで、このように確認してみた経験が後に他のデザインをするときに生きてくる。

### 5— 書体はできるだけ少なくする



1つのデザインに使う書体の数をあまり増やすと、統一感がなくなることが多いので、同じ書体を使って、場所や期間の情報を表示する。日本語書体は、セリフ体の欧文にあうように、明朝体で表示する。あまり大きくない明朝体で重要な内容を表示する場合は、周囲に余白を多めにとること。

### 練習1 背景のコントラストで文字を目立たせる



セリフ体は、文字だけでは太いサンセリフ体のような強烈な力強さはないので、背景の色を工夫することで文字を引き立てて、タイトルとしての機能を果たせるようにしてみます。

### 1— セリフ系の書体を選ぶ



タイトルである「TYPO EXPO」を左右いっぱい配置。この段階で、いくつかの書体を使って試そう。シャープなイメージにしたいため、よく使われるセリフ書体の中から、縦横の線の太さの差が大きく、セリフ部分が直線的な Bodoni を選択する。

### 2— 頭文字以外を小文字にする



このままでは「TYPO」と「EXPO」が重なって見えてしまい、単語を認識しにくい。単語の分け目をうまく認識できるようにしたい。そこで、頭文字以外を小文字にして、「Typo」「Expo」と表記する。